

## 郊外住宅地に居住する高齢者の外出行動 (I) －盛岡市松園地域を例に－

高橋宏一・土田美奈子\*

- I. はじめに
- II. 調査の目的と方法
- III. 高齢者の属性と外出手段
- IV. 高齢者による居住地区の生活環境評価
- V. 高齢者の生活スタイル (以上本号)
- VI. 高齢外出者の目的別外出行動 (以下次号)
- VII. 全外出度数からみた高齢者の目的別外出行動
- VIII. 総外出度数からみた高齢者の外出行動の促進要因と抑制要因－まとめにかえて－

### I. はじめに

#### 1. 問題意識

日本の高齢化は、出生率の低下と平均寿命の延びを背景として、他国に例を見ないほど急速に進んでいる。高齢化率は1994年には14%を超えて「高齢社会」へ移行し、2007年には21%をも越え「超高齢社会」に突入した。さらに、国立社会保障・人口問題研究所の予測によると、2055年には全人口の約40%が高齢者という極端な「超高齢社会」が到来するという<sup>1)</sup>。

このような人口構造の変化に伴い、医療や介護対策の重要性が増す一方で、社会の活力を維持していくためには高齢者の社会参加が重要であり、その活動の舞台として地域社会の見直しが迫られている<sup>2)</sup>。そのためには、高齢者の約77%を占める健常な高齢者が<sup>3)</sup>、自立した生活を継続できるように外出しやすい生活環境を整備することが急がれる。

高齢期は、加齢に伴う身体的機能の低下や仕事からの引退などによって、日常生活圏が変化していく時期である。つまり、身体的機能や社会的環境の変化に伴い、買物・通院・屋外での余暇活動などの日常生活における諸活動は、相対的に居住地域内で行われる機会が多くなってくる。このように、高齢期への移行とともに地域社会の重要性が増すため、高齢者が心身とも

---

\* 青森県警察本部

1) 国立社会保障・人口問題研究所による日本の将来推計人口(平成18年12月推計)は、H.P ( <http://www.ipss.go.jp/> )に掲載されている。

2) 坪本裕之、樋口民夫 2000「地形図と「都市計画図で考える高齢者の移動交通①・② 地理45-1 pp.76-82 45-2 pp.69-76;宮澤仁編著『地域と福祉の分析法－地図・GISの応用と実例－』古今書院所収

3) 厚生労働省の「平成19年国民生活基礎調査」によると、健康上の問題で日常生活に影響がある者の割合(日常生活に影響のある者率)は、65歳以上では22.6%を占めている。「平成19年国民生活基礎調査」のH.P.は、<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa07/3-3.html>。

にその健康を維持できる地域社会の形成が重要であると考えられる<sup>4)</sup>。今後はさらなる核家族化に伴って、高齢者のみの夫婦世帯や単独世帯が一層増加し、高齢者自身で生活を営む必要性が高まる。高齢者が自立して生活していくためには、積極的に外出行動を行い、地域とのつながりを継続していくことが必要である。

このように高齢者が外出して様々な活動に関わり、他者との接触を継続的に楽しむことは、精神的・肉体的健康を維持する上でとても重要である<sup>5)</sup>。しかしながら、従来の調査・研究では、高齢者は非高齢者と比較して「在宅時間が長い」、「活動範囲が狭い」、「高齢者の外出率は非高齢者に比べて低い」、「郊外では外出率が低い」などと言われており<sup>6)</sup>、一般的には高齢になると、生活空間が縮小する傾向にあるのが現状である。特に郊外ニュータウンでは、近い年齢層の人々がほぼ同じ時期に移住してきたため、高齢化も一斉に進む傾向がある。そのため、多くの高齢者住民の生活空間が郊外ニュータウン内で閉じてしまう可能性がある。しかしながら、当初多くの郊外ニュータウンは小さい子供を持つ核家族のニーズを満たす生活環境を提供してくれる居住地域として開発されたため、高齢化に伴って住民の身体的機能や社会的環境が変化すると、生活環境への不満も目立つようになってくる。例えば、都市の郊外に位置するという立地環境と相まって、地域内の移動や他地域への移動に困難を生じるなど、従来はあまり生活環境に不便を感じなかったが、高齢化に伴って不満をいだく住民が増加する傾向にある。そこで、地域内や地域間の公共交通の再編など、生活環境の見直しが必要となってくる<sup>7)</sup>。

以上述べたような問題意識のもとに、今後特に深刻な高齢化が予想される郊外ニュータウンとして地方中心都市である盛岡市の松園ニュータウンを対象地域として取り上げた。そして、そこに居住する65歳以上の高齢者を対象としてアンケート調査を行い、高齢者の外出行動の実態を明らかにした上で、外出行動の促進要因や抑制要因を明らかにすることを本研究の目的とした。その際、特に高齢者の外出頻度に注目した。外出頻度は高齢者にとって心身の総合的な健康状態を表す指標の一つとされている<sup>8)</sup>。なぜなら、外出意欲の保持および外出の継続こそが、身体的能力や精神的健康の維持に寄与すると考えられているからである。

## 2. 研究対象地域の概要

研究対象地域の松園ニュータウンは、盛岡市中心部から北北東約6キロの丘陵地に位置している。本県最大の住宅団地であり、1970年に造成工事が開始され、1972年から入居が始まった。造成当時としては、東北最大級の住宅団地であった。しかし、現在ではニュータウン内の住民の高齢化が深刻化し、また、第二世代の他地域での居住などに伴う人口減少の問題にも直面している。

住民基本台帳によると、松園ニュータウンの人口は1985年(昭和60)に約14,000人でピークと

- 
- 4) 橋弘志, 高橋鷹志 1997 地域に展開される高齢者の行動環境に関する研究—大規模団地と既成市街地におけるケーススタディー— 日本建築学会計画系論文集 第496号 pp.89-95
  - 5) 室永芳久, 両角光男 2003 地区環境に応じた高齢者の外出行動の相違に関する事例研究—熊本市における外出活発地区・非活発地区の比較分析— 日本建築学会計画系論文集 第566号 pp.63-70
  - 6) 室永芳久, 両角光男 2003 地区環境に応じた高齢者の外出行動の相違に関する事例研究—熊本市における外出活発地区・非活発地区の比較分析— 日本建築学会計画系論文集 第566号 pp.63-70 : 中鉢奈津子 1998 京都市における高齢者の外出行動 人文地理 第50巻2号 pp.172-187
  - 7) 坪本裕之, 樋口民夫 2000 「地形図と」都市計画図で考える高齢者の移動交通①・② 地理45-1 pp.76-82 45-2 pp.69-76 ; 宮澤仁編著『地域と福祉の分析法—地図・GISの応用と実例—』古今書院所収
  - 8) 中鉢奈津子 1998 京都市における高齢者の外出行動 人文地理 第50巻2号 pp.172-187

なったが、2009年3月末には10,113人にまで減少している<sup>9)</sup>。また、2009年3月末時点での盛岡市の高齢化率(人口に占める65歳以上人口の割合)は21.0%であるが、松園ニュータウンの高齢化率は26.6%と、市の平均を大きく上回っている。その中でも松園1～2丁目は古くからの住民が多く、当ニュータウンの中でも特に高齢化が進んでいる。最も高い松園2丁目の高齢化率は41.8%で、60歳以上の人口割合も52%にのぼり、今後一層急速に高齢化が進展することが予想される。

交通面では、従来より松園ニュータウンと盛岡駅及び盛岡バスセンター等とを直接結ぶ路線バス(岩手県交通)が走っていたが、2001年7月より「松園地域グリーンバス」が導入された。これにより従来の直通バスが激減し、松園バスターミナル(ニュータウン南端部に位置する)と盛岡駅や盛岡バスセンターなどの盛岡中心部とを結ぶ「基幹バス」と、松園バスターミナルから松園ニュータウンや北接する北松園・小鳥沢地域内を通してターミナルに戻る「支線バス」とに分離して運行されるようになった。これにより、松園ニュータウン内では以前より路線網が密になるようになったものの、「ターミナルでの乗り換えが不便」といった意見も多く、松園ニュータウンの住民にとっては必ずしも満足いくものとはなっていないようである。

## II. 研究の目的と方法

### 1. 研究目的

松園ニュータウン(以下では、松園地域と呼ぶことにする)に居住する高齢者の外出行動の実態を明らかにすることが本研究の目的であるが、実際の高齢者の外出行動は個人によって多種多様である。そこで、まず多様な外出行動を整理してその実態を記述し、さらにそのような違いを生み出す要因(促進要因や抑制要因)を明らかにするために、本研究では具体的には次のような目的を設定した。

まず、性別や年齢などの属性が同じ人は、同じような行動パターンを取る傾向があるので、高齢者の属性と外出行動との関連を明らかにする。次いで、郊外ニュータウンといっても松園地域のように大規模ニュータウンの場合は、地域内でも歩行環境や買物環境などの生活環境が居住地区によって異なっている場合が多いと考えられる。そこで、松園地域の中でも生活環境が異なる居住地区の高齢者の外出行動を調査することで、生活環境が高齢者の外出行動に与える影響についても明らかにする。さらには、高齢者が日常生活の中で何を重視して生活しているのかという観点から生活スタイルをとらえ、高齢者の生活スタイルと外出行動との関連についても考察していきたい。

### 2. 研究方法

#### (1) 調査地区

前述した研究目的との関連から、生活環境に特徴があると考えられる次の5地区を選出して<sup>10)</sup>、アンケート調査を行った(図1)。

---

9) 盛岡市の住民基本台帳登録人口(平成21年3月末日)の町丁字別・年齢5歳階級別人口は、盛岡市のH.P.に掲載されている。<http://www.city.morioka.iwate.jp/dtl/statisticsdl.nsf/ViewForm?OpenForm&VwID=010>



図1 松園地域と調査地区

- ①南部地区：松園1丁目の西部。松園地域中心部から遠く、かつ地形の起伏があつて坂が多い地区。
- ②中央地区：松園2・3丁目の北部。松園生協をはじめとする商業・サービス施設や松園地区活動センター等の公共施設が集中して立地している松園地域の中心部に隣接する地区。
- ③西部地区：西松園3丁目の西部。松園地域中心部とは比較的近い
- ④東部地区：東松園1丁目の北部。松園地域中心部とは比較的近い。県営松園東アパートを含む地区。
- ⑤北部地区：西松園4丁目の北部。松園地域中心部からやや遠いが、地形の起伏があまりない平坦な地区。

## (2) 調査項目

調査項目は、大きく分けると次の4つからなっている。

### ①高齢者の属性

回答者の属性として、性別、年齢、世帯の家族構成、就業状況、一人での外出可能性、車の運転能力、世帯の車所有状況を尋ねた。

### ②自宅周辺の生活環境評価

自宅周辺の生活環境として、地形の起伏が富んでいて、坂や階段が多いかどうか(歩行環境)、歩道が整備されていて歩きやすいかどうか(歩道環境)、バスの便が良いかどうか(バス環境)、日常的な買物の便が良いかどうか(買物環境)、公共施設の利用の便が良いかどうか(公共施設環境)の5つの観点から、各々について4段階で評価してもらった。

### ③生活スタイル

回答者が日常生活で重視する活動として、「個人的趣味」、「家事・育児」、「買物」、「通院」、「家でゆっくり過ごす」、「家族と一緒に過ごす」、「散歩」、「仕事」、「友人・近所との付き合い」、「教室・サークル・スポーツ」、「ボランティア活動」、「その他」の12活動から3つまで選択してもらった。

### ④外出行動毎の外出先・利用施設名、外出先の所在地、外出頻度、主な交通手段

取り上げた外出行動は、食料品買物、衣料品買物、生活用品買物、通院、趣味活動(教室・サークル・スポーツを含む)、友人・知人宅訪問、散歩の7種類である。散歩を除く各行動については、月に1回以上外出する外出先を3つまであげてもらい、各々の外出先について外出先・利用施設名、外出先の所在地、外出頻度、主な交通手段を回答してもらった。散歩については主な立ち寄り先と外出頻度のみ答えてもらった。

10) 2008年8月～9月にかけて実地調査を行い、特に歩行環境と買物環境を重視して、特徴が異なる5つの居住地区を選定した。

### (3) 調査票の配布と回収

調査票の配布は、2008年11月23・24日に、上記5地区から各100世帯を抽出して、ポスティングにて行った。ただし、抽出世帯での高齢者の有無は事前にはわからなかったため、1世帯につき調査票を2部ずつ配布して、世帯内の65歳以上の高齢者に回答を求め、郵送にて調査票の回収を行った。

総配布数は1000部で、有効回答数は332人、有効回答率は33.2%であった。地区毎の有効回答数と有効回答率は、南部地区39人(19.5%)、中央地区74人(37.0%)、西部地区89人(44.5%)、北部地区53人(26.5%)、東部地区77人(38.5%)であった。ただし、調査票配布世帯での高齢者の有無や高齢者の人数はわからないため、厳密な意味での有効回答率は不明である。

### (4) 外出度数の算出

各外出行動の外出頻度に関して、属性などのグループ間で比較を行うために、外出行動の外出頻度に関する回答選択肢に対して、調査票回収後外出頻度の換算を行なった<sup>11)</sup>。その上で各個人が同じ種類の外出行動(例えば食料品買物)において複数の外出先を利用している場合、それらを合計して個人毎に一月平均の外出回数(以下では、外出度数と呼ぶ)を算出した<sup>12)</sup>。

## Ⅲ. 高齢者の属性と外出手段

ここでは、まず調査票に回答した高齢者の属性からみた松園地域高齢者の全体的特徴や地区毎の特徴について述べる。次に、属性の中でも一人での外出可能性と車運転能力の2つは、外出手段として直接外出行動と関わっているので、他の属性との関連をみる。

### 1. 高齢者(回答者)の属性

以下に、回答した高齢者の属性(ただし、一人での外出可能性と車運転能力を除く)の特徴について、箇条書きで列挙した(表1参照)。

- ・性別は、男女ほぼ半々。
- ・年齢別では、前期高齢者(65～74歳)が約7割、後期高齢者(75歳以上)が約3割。ただし、南部地区と西部地区では、比較的前期高齢者が多く(約8割)、中央地区と東部地区では、比較的後期高齢者が多い(約4割)。
- ・家族構成を見ると、81%の人が配偶者と同居。息子(婿)または娘(嫁)と同居しているのは39%、親と同居しているのは1.5%。

11) 食料品買物と散歩は、他の外出行動よりも外出頻度が多いと予想されたため、外出頻度に関する選択肢が多少異なっている。このため、外出行動を2グループに分け、各々次のような換算を行って、外出度数を算出した。

①食料品買物と散歩の場合(前者が選択肢で、後者が換算した一月平均頻度)

月1回程度→1回、月2～3回→2.5回、週1回程度→4回(週1回4週分)、週2～3回→10回(週2.5回4週分)、週4回以上→20回(週5回4週分)

②食料品買物と散歩以外の外出行動(前者が選択肢で、後者が換算した一月平均頻度)

月1回程度→1回、月2～3回→2.5回、週1回程度→4回(週1回4週分)、週2回以上→12回(週3回4週分)

12) ただし、今回の調査では、同じ種類の外出行動でも外出先毎に違う外出行動とみなしている。このため、1日の外出で複数の外出先に立ち寄る場合もあるので、外出度数は一月に平均何日外出しているかということを厳密には意味していないが、それに近い概数とみることにはあまり問題はないであろう。

表1 地区別にみたサンプルの性別と年齢

地区	性別	年齢				合計
		65～69歳	70～74歳	75～79歳	80歳以上	
南部地区 (松園1丁目)	男性	14 60.9	5 21.7	4 17.4	0 0.0	23 100.0
	女性	8 50.0	5 31.3	1 6.3	2 12.5	16 100.0
	計	22 56.4	10 25.6	5 12.8	2 5.1	39 100.0
中央地区 (松園2・3丁目)	男性	14 35.9	10 25.6	9 23.1	6 15.4	39 100.0
	女性	12 34.3	10 28.6	10 28.6	3 8.6	35 100.0
	計	26 35.1	20 27.0	19 25.7	9 12.2	74 100.0
西部地区 (西松園3丁目)	男性	22 44.9	17 34.7	7 14.3	3 6.1	49 100.0
	女性	23 57.5	7 17.5	5 12.5	5 12.5	40 100.0
	計	45 50.6	24 27.0	12 13.5	8 9.0	89 100.0
北部地区 (西松園4丁目)	男性	14 51.9	4 14.8	8 29.6	1 3.7	27 100.0
	女性	11 42.3	8 30.8	4 15.4	3 11.5	26 100.0
	計	25 47.2	12 22.6	12 22.6	4 7.5	53 100.0
東部地区 (東松園1丁目)	男性	10 30.3	10 30.3	8 24.2	5 15.2	33 100.0
	女性	14 32.6	12 27.9	10 23.3	7 16.3	43 100.0
	計	24 31.6	22 28.9	18 23.7	12 15.8	76 100.0
松園地域	男性	74 43.3	46 26.9	36 21.1	15 8.8	171 100.0
	女性	68 42.5	42 26.3	30 18.8	20 12.5	160 100.0
	計	142 42.9	88 26.6	66 19.9	35 10.6	331 100.0

- ・家族数では、高齢者の単独世帯は7%と少なく、二人世帯(大半は夫婦のみの世帯)が58%を占め最も多い。平均家族数は2.7人。
- ・居住形態は、95%の人が自己所有の一戸建てに居住。ただし、東部地区では、16%が県営住宅に居住。
- ・就業状況は、現在無職の人が84%。
- ・自分専用の車が有る人は51%、自分専用ではないが世帯に車が有る人は37%、世帯に車が無い人は12%。

## 2. 高齢者の外出手段

### (1) 一人での外出可能性

回答した高齢者の一人での外出可能性(一人で自由に外出できるかどうか)からみた特徴と他の属性との関連について、以下に箇条書きで列挙した(表2, 表3参照)。

- ・松園地域全体では、一人で自由に外出できる人の割合(外出可能率)は93%
- ・性別では、男性の96%が一人で自由に外出可能だが、女性では89%。
- ・年齢別では、前期高齢者の95%以上が一人で自由に外出可能だが、後期高齢者では85%に低

表2 性別・年齢別にみた一人での外出可能性

性別・年齢	一人での外出		合計
	可	不可	
男65～69歳	72 97.3	2 2.7	74 100.0
男70～74歳	45 97.8	1 2.2	46 100.0
男75～79歳	35 97.2	1 2.8	36 100.0
男80歳以上	12 80.0	3 20.0	15 100.0
男性 計	164 95.9	7 4.1	171 100.0
女65～69歳	65 95.6	3 4.4	68 100.0
女70～74歳	39 92.9	3 7.1	42 100.0
女75～79歳	25 83.3	5 16.7	30 100.0
女80歳以上	14 70.0	6 30.0	20 100.0
女性 計	143 89.4	17 10.6	160 100.0
合計	307 92.7	24 7.3	331 100.0

表3 車運転能力及び年齢別にみた一人での外出可能性

車の運転	年齢	一人での外出		合計
		可	不可	
可	65～69歳	95 99.0	1 1.0	96 100.0
	70～74歳	52 100.0	0 0.0	52 100.0
	75～79歳	31 100.0	0 0.0	31 100.0
	80歳以上	10 100.0	0 0.0	10 100.0
	計	188 99.5	1 0.5	189 100.0
不可	65～69歳	42 91.3	4 8.7	46 100.0
	70～74歳	32 88.9	4 11.1	36 100.0
	75～79歳	29 82.9	6 17.1	35 100.0
	80歳以上	16 64.0	9 36.0	25 100.0
	計	119 83.8	23 16.2	142 100.0
合計	307 92.7	24 7.3	331 100.0	

に外出可能率が低下している。運転できない人には、運転免許を保有しているが身体的な問題で運転できない人と、運転免許を保有していない人がいる。今回の調査では車の運転免許の有

下。特に女性の低下が著しい。

- ・配偶関係では、配偶者がいる人は95%が一人で自由に外出可能だが、いない人では84%。
- ・車運転能力別では、車運転できる人のほぼ100%が一人で自由に外出可能だが、運転できない人では84%。車運転できない人では、加齢と共に外出可能率が低下。
- ・車所有別では、自分専用の車が有る人は100%一人で自由に外出可能だが、自分専用ではないが自宅に車が有る人は87%、世帯に車が無い人では80%に低下。

以上のように、回答したほとんどの高齢者は一人で外出可能だが、女性、後期高齢者、配偶者がいない人、車の運転ができない人、世帯に車が無い人には、一人では外出できない人が相対的に多い(11～15%)。ただし、同じ年齢層で比較すると、性別や配偶関係の違いによる外出可能率の差はあ

まりなく、性別や配偶関係と外出可能性との間には直接的な関連はみられない。つまり、女性や配偶者がいない人には、男性や配偶者がいる人に比べて相対的に高年齢の高齢者が多いために、見かけ上一人で外出できない人が多くいるようにみえるにすぎない。また、車の運転能力別に世帯の車所有と外出可能率との関係もみたが、世帯の車所有と外出可能率の両者の間には直接的な関連は認められなかった。

結局、高齢者が一人で自由に外出できるかどうかは、高齢者の年齢と車の運転能力に影響されていることが分かる。表3をみるとわかるように、車が運転できる人(回答者の57%を占める)はどの年齢層でもほぼ100%一人で外出可能だが、運転できない人(回答者の43%)では加齢と共に

無を尋ねなかったので明確には言えないが、運転できないと答えた人の多くは、運転免許を保有していない人と考えられる。

このように、高齢者は高齢になるほど身体的機能の衰え等により、自由に一人では外出できにくくなるが、自家用車を利用することでその身体的なハンデをある程度補っていると推測される。つまり、高齢者は加齢により、外出先の店舗・施設や最寄バス停等までの徒歩や自転車等による移動が次第に困難になるが、自家用車利用はその負担を軽減し、高齢者に外出しやすい手段を提供していると考えられる。

## (2) 車運転能力

回答者の車運転能力(車が運転が可能かどうか)からみた特徴と他の属性との関連について、以下に箇条書きで列挙した(表4参照)。

表4 性別・年齢別にみた車運転能力

性別・年齢	車の運転		合計
	可	不可	
男65～69歳	71 95.9	3 4.1	74 100.0
男70～74歳	40 87.0	6 13.0	46 100.0
男75～79歳	29 80.6	7 19.4	36 100.0
男80歳以上	9 60.0	6 40.0	15 100.0
男性 計	149 87.1	22 12.9	171 100.0
女65～69歳	25 36.8	43 63.2	68 100.0
女70～74歳	12 28.6	30 71.4	42 100.0
女75～79歳	2 6.7	28 93.3	30 100.0
女80歳以上	1 5.0	19 95.0	20 100.0
女性 計	40 25.0	120 75.0	160 100.0
合計	189 57.1	142 42.9	331 100.0

- ・松園地域全体では、車の運転が可能な人の割合(運転可能率)は57%。
- ・性別では、男性の87%が車運転可能だが、女性では25%。
- ・年齢別では、65～69歳の人では男女合わせて68%の人が車運転可能だが、年齢の上昇共に運転可能率は低下し、80歳以上では29%。
- ・配偶関係では、配偶者がいる人の64%が車運転可能だが、いない人では29%。
- ・車所有別では、自分専用の車が有る人の98%車運転可能だが、自分専用ではないが自宅に車が有る人は18%、世帯に車が無い人では8%が可能。
- ・就業状況別では、無職の人の53%が車運転可能だが、有職の人では80%が可能。

以上のように、高齢者で車の運転が可能な人は6割弱であるが、その割合は属性によってかなり異なっている。男性、前期高齢者、配偶者がいる人、自分専用の車が有る人、有職の人の運転可能率はいずれも65%以上と、そうでない人に比べてかなり高い値を示している。

ただし、同じ性別で比較すると、就業状況による運転可能率の差はほとんどなく、就業状況にかかわらず、男性の運転可能率の割合は高い。また、配偶者がいる割合は、高齢者でも年齢が若い人ほど、また女性より男性の方が高いため、結果的に配偶者がいる人の方がいない人よりも、運転可能率が高くなる。さらに、運転が可能な人は、自分専用の車を持ちやすいことは明らかである。

結局車の運転が可能かどうかは、性別と年齢によってかなり規定されており、女性より男性の方が、また同じ性でも年齢が若い高齢者ほど、運転可能率が高い。しかし、高度成長期以降のモータリゼーションの進行により、65歳未満の世代では車の免許取得率が急速に高まっており、運転可能率の年齢による違いや男女差は今後は次第に縮まっていくものと見込まれる。そ

れでも、男性と女性の間の大きな差が解消されるにはかなりの時間がかかると予想されるし、また免許所得者であっても高齢になるにつれて身体的問題で運転ができなくなり、一人では外出できなくなる可能性が高まってくるという問題もある。

以上のことをまとめると、高齢者が一人で自由に外出できるかどうかは、一般的には図2に示したように、性別と年齢と車運転能力によって決まると言える。

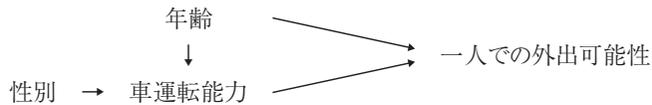


図2 高齢者の一人での外出可能性の規定要因

#### IV. 高齢者による居住地区の生活環境評価

ここでは、高齢者が自宅周辺の生活環境についてどのように評価しているかについてその特徴をみる。高齢者の生活環境評価と外出行動との関連については後で述べることにする。

##### 1. 生活環境評価の方法

高齢者に自宅周辺の生活環境について、次の5項目の点から評価してもらった。

- ①「地形の起伏が富んでいて、坂や階段が多いかどうか」（以下では、歩行環境と呼ぶ）
- ②「歩道が整備されていて歩きやすいかどうか」（以下では、歩道環境と呼ぶ）
- ③「バスの便が良いかどうか」（以下では、バス環境と呼ぶ）
- ④「日常的な買物の便が良いかどうか」（以下では、買物環境と呼ぶ）
- ⑤「公共施設の利用の便が良いかどうか」（以下では、施設環境と呼ぶ）

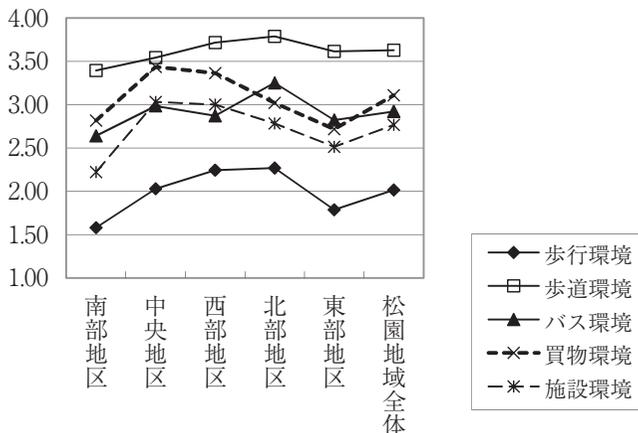


図3 地区別にみた生活環境評価

地区毎および項目毎の生活環境評価を比較するため、歩行環境を除く4項目については、各項目の選択肢の「かなり当てはまる」に4点、「多少当てはまる」に3点、「あまり当てはまらない」に2点、「全く当てはまらない」に1点を与え、平均得点と標準偏差を算出した。歩行環境だけは、逆に「かなり当てはまる」に1点、以下順に点数を与え、「全く当てはまらない」には4点を与えて計算した。それらの結果

を示したのが、図3である。図ではいずれの項目も得点が高いほど(最高点は4点,最低点は1点),プラスの評価がされていることになる。

## 2. 歩行環境評価(地形の起伏が富んでいて、坂や階段が多いかどうか)

松園地域全体の平均点は2.0と5項目の中で特段に低く、どの地区でも全体的に低い評価がなされている。中でも南部地区は1.6、東部地区は1.8と特に低い。南部地区は松園ニュータウン南端部に当たり、ニュータウンの南側にある谷に向かって地形面がかなり傾斜し、坂がきついことが低評価につながったと考えられる。東部地区では、地区回答者の16%を占める県営アパート居住者の評価が1.6と低いこともあるが、地区のすぐ東側に丘陵地があり、地区内が階段状の地形になっていることが影響しているではと考えられる。ただし、歩行環境評価得点の標準偏差は松園地域全体では0.92と大きく、歩行環境評価は個人差が大きいことが分かる。

## 3. 歩道環境評価(歩道が整備されていて歩きやすいかどうか)

5項目の中では最も評価が高く、松園地域全体の平均点は3.6だった。地区間の差違もあまり無く、標準偏差も地域全体では0.64と個人差も小さい。松園地域内では、どの地区でも幹線道路は車道と歩道が分離されているが、住宅地区内部の支線道路は分離されていない。それでも住宅地内部は通過交通がほとんどなく、車の通行量も少ないことが高い評価につながったと考えられる。

## 4. バス環境評価(バスの便が良いかどうか)

松園地域全体の平均点は2.9とさほど高くはない。地区別に見ると北部地区が3.3で最も高く、南部地区が2.6と最も低い。一般的には最寄バス停までの距離とバスの本数が評価に関係すると考えられる。その点で、南部地区を通る支線バスは1系統のみで、しかも双方向ではなく一方回りの循環線であることが低評価につながったと考えられる。ただし、バス環境評価得点の標準偏差は地域全体では0.94と大きく、バス環境の評価も歩行環境と同様に個人差が大きいことが分かる。

## 5. 買物環境評価(日常的な買物の便が良いかどうか)

松園地域全体の平均点は3.1で、歩道環境に次ぐ高い評価がなされているが、南部地区(2.8)や東部地区(2.7)では少し低い。松園地域では、小売店やサービス店は松園地域中心部に集中立地しているため、中心部に近い中央地区では高く評価し、遠い南部地区では評価が低くなるのは当然のことと言えよう。

## 6. 施設環境評価(公共施設の利用の便が良いかどうか)

松園地域全体の平均点は2.8と高くはなく、かつ中央地区と西部地区の3.0から南部地区の2.2まで、地区間の差が5項目の中で最も大きくなっている。買物環境の場合と同様に、公共施設が地域中心部に集中しているため、中心部に近い地区ほど評価が高く、遠い地区ほど評価が低い。ただし、どの地区でも買物環境の場合よりも0.2~0.6点ほど低く、店舗の場合以上に公共施設の配置が地域的に偏っており、中心部から離れた地区の居住者には利用しにくいと評価されていると言える。

## 7. 生活環境評価のまとめ

全体的に歩道環境の評価は高く満足できるものと言えるが、逆に歩行環境の評価はどの地区でもかなり低くなっている。バス環境、買物環境、施設環境の3項目については、地区や個人に

よって評価は分かれるが、全体的には松園地域中心部との位置関係に左右され、近い地区では評価が高いが、中心部から離れるにつれて評価は低下していることがわかる。なお、生活環境評価と高齢者個人の属性との関連についても調べてみたが、特に目立った関連は認められず、前述したような属性以外の要因が生活環境評価に関連している。

### V. 高齢者の生活スタイル

本研究では、高齢者が日常生活で重視する活動の観点から生活スタイルを把握した。具体的には、高齢者が日常生活で重視している活動を、表5に掲げた12活動の中から最高で3つまで選

表5 性別・年齢別にみた生活スタイル（日常生活で各活動を重視する人の割合）  
(単位 %)

年齢	個人的趣味	家事・育児	買物	通院	家でゆっくり過ごす	家族と一緒に過ごす	散歩
男65～69歳	67.6	0.0	18.9	14.9	25.7	37.8	24.3
男70～74歳	63.0	4.3	23.9	32.6	32.6	21.7	23.9
男75～79歳	55.6	13.9	33.3	36.1	16.7	30.6	25.0
男80歳以上	33.3	0.0	26.7	46.7	26.7	40.0	20.0
男性計	60.8	4.1	24.0	26.9	25.7	32.2	24.0
女65～69歳	30.9	27.9	38.2	25.0	7.4	19.1	17.6
女70～74歳	38.1	21.4	50.0	23.8	23.8	14.3	11.9
女75～79歳	26.7	16.7	53.3	50.0	23.3	20.0	13.3
女80歳以上	45.0	15.0	45.0	45.0	15.0	20.0	0.0
女性計	33.8	22.5	45.0	31.9	15.6	18.1	13.1
65～69歳	50.0	13.4	28.2	19.7	16.9	28.9	21.1
70～74歳	51.1	12.5	36.4	28.4	28.4	18.2	18.2
75～79歳	42.4	15.2	42.4	42.4	19.7	25.8	19.7
80歳以上	40.0	8.6	37.1	45.7	20.0	28.6	8.6
合計	47.7	13.0	34.1	29.3	20.8	25.4	18.7
年齢	仕事	友人・近所との付き合い	教室・サークル・スポーツ	ボランティア活動	その他	無回答	実人数(人)
男65～69歳	24.3	21.6	29.7	16.2	1.4	2.7	74
男70～74歳	10.9	34.8	19.6	17.4	0.0	4.3	46
男75～79歳	2.8	27.8	27.8	8.3	2.8	2.8	36
男80歳以上	13.3	26.7	20.0	0.0	6.7	0.0	15
男性計	15.2	26.9	25.7	13.5	1.8	2.9	171
女65～69歳	7.4	44.1	45.6	16.2	1.5	4.4	68
女70～74歳	7.1	35.7	33.3	7.1	4.8	4.8	42
女75～79歳	6.7	36.7	13.3	3.3	6.7	3.3	30
女80歳以上	5.0	25.0	30.0	0.0	5.0	15.0	20
女性計	6.9	38.1	34.4	9.4	3.8	5.6	160
65～69歳	16.2	32.4	37.3	16.2	1.4	3.5	142
70～74歳	9.1	35.2	26.1	12.5	2.3	4.5	88
75～79歳	4.5	31.8	21.2	6.1	4.5	3.0	66
80歳以上	8.6	25.7	25.7	0.0	5.7	8.6	35
合計	11.2	32.3	29.9	11.5	2.7	4.2	331

択してもらった。これらの活動は、「通院」を除けば一般的には高齢者の「生きがい」に通じる活動と言えるものであり、それらは高齢者の生活スタイルを反映していると考えられる。表には、各活動について何%の人がその活動を選択したのかを、性別かつ年齢別に示してある。以下では、高齢者の生活スタイルの特徴について述べ、それと外出行動との関連については後で述べることにする。

### 1. 高齢者の生活スタイルの全体的特徴

地域全体では「個人的趣味」を重視している人が48%と最も多く、次いで「買物」と「友人・近所との付き合い」を重視している人が30%を超えている。さらに、「教室・サークル・スポーツ」、「通院」、「家族と一緒に過ごす」、「家でゆっくり過ごす」が20%を上回っている。また、「通院」を除いて、一人あたり平均2.5種類の活動を重視しており、多くの高齢者が複数の「生きがい」をもって生活していることが分かる。

### 2. 高齢者の生活スタイルの性別特徴

男性と女性とでは重視する活動がかなり異なっており、男性では「個人的趣味」が61%と特に多い。また、「家族と一緒に過ごす」、「家でゆっくり過ごす」、「散歩」が女性と比べてその割合が10%以上高い。一方女性では、「買物」、「友人・近所との付き合い」、「教室・サークル・スポーツ」の3つが多く、男性よりも約10~20%上回っている。

後述するように趣味活動での外出頻度が男性よりも女性の方が多いことを考慮すると、男性の好む「個人的趣味」には比較的家庭内で行う活動が多いと推測される。つまり、男性が日常生活で重視している活動には、主に家庭内で一人であるいは家族と一緒に行う活動が多い。また、「散歩」のように外で活動する場合でも家族以外の人とはあまり接触しない活動が相対的に多く、女性と比較して「内向型」と呼べるような活動が多い。

それに対して、女性の場合は家庭の外へ出かけて行き、しかも「友人・近所との付き合い」、「教室・サークル・スポーツ」のように家族以外の他者と積極的にコミュニケーションをとる「外向型」と言える活動を重視している。一般に女性の場合は、松園地域に長年居住している間に、地域に根ざした地縁的な関係を築いている場合が多い。専業主婦はもちろんであるが、就業していた女性でも子供を介した交友関係のネットワークは広がっており、高齢者になったからといってそれらが急に消滅するわけではない。しかしながら、男性の場合は、退職などに伴ってそれまでの仕事を通じた社縁的な関係が疎遠になりがちである。かといって自ら働きかけない限りは、新たな地縁的な関係も築きにくい。このようなことが男女の生活スタイルの違いに反映されていると考えられる。

### 3. 高齢者の生活スタイルの年齢別特徴

年齢別に見ると、加齢に伴って「通院」を重視する人の割合が増加し、後期高齢者では4割以上の人が重視している。逆に「散歩」、「仕事」、「ボランティア活動」のような身体的活動の割合は減少している。それでも、80歳以上の人でも、「通院」を除いて一人あたり2.1種類の活動を重視しており、多くの高齢者が複数の「生きがい」をもって生活している。

(以下次号に続く)